

ライフリズムナビ活用事例共有会

～「小さなPDCA」で定着させる見守りシステム運用～

令和8年8月20日

社会福祉法人尾道さつき会
特別養護老人ホーム星の里
施設長 山下 清文
人事課 宮地 公平



法人紹介

法人名 社会福祉法人尾道さつき会 昭和57（1982）年6月24日設立

所在地 広島県尾道市久保町1786番地

高齢者施設

介護老人福祉施設、軽費老人ホーム、認知症対応型共同生活介護、居宅介護支援
地域包括支援センター、通所介護、訪問介護、短期入所、小規模多機能居宅介護 など

実施事業

障害児者施設

施設入所、短期入所、児童発達支援、放課後デイ、生活介護、共同生活援助、
相談支援、日中一時支援、就労支援A・B など

その他

専門学校（介護福祉士）、救護施設

従業員数 634名（正職員240名、准職員394名）



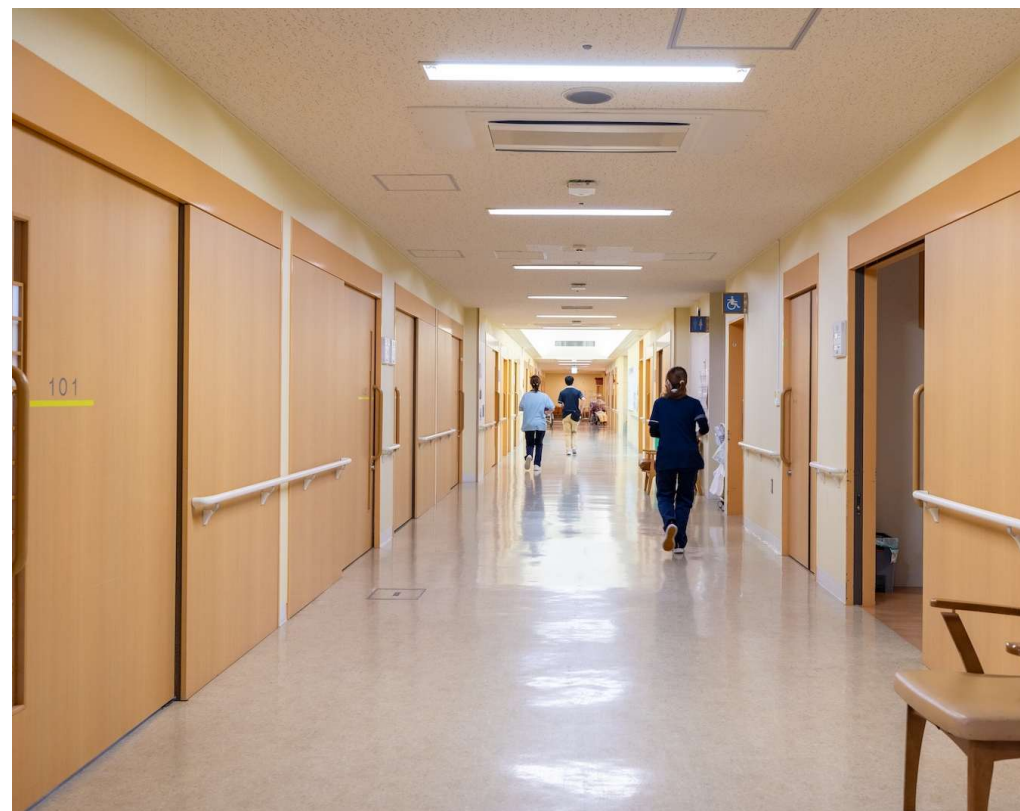
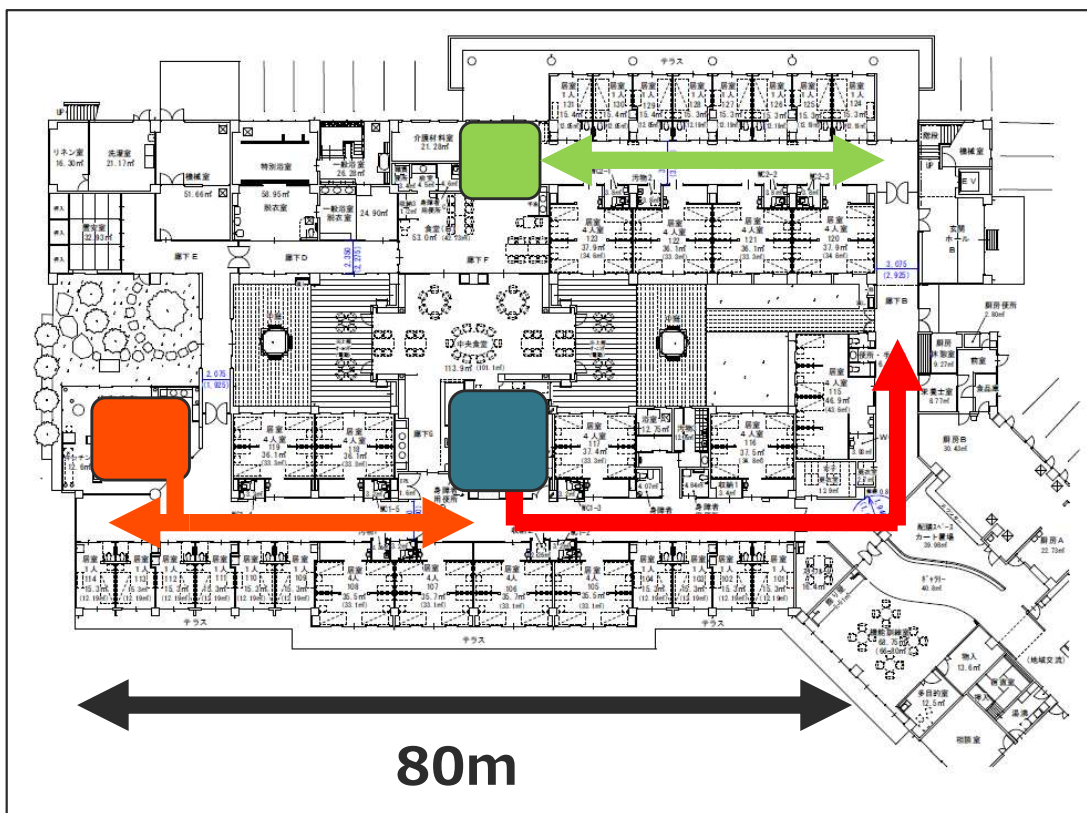
施設紹介

施設名 特別養護老人ホーム星の里

定員数 70名（個室18室、4人部屋13室）

抱えていた課題

- ・移動距離が長く、身体的な負担が大きい
- ・回廊型のため死角が多く、転倒や転落に対する不安が強い。



施設が目指す姿

- 介護テクノロジーの導入を通じて、職員の気力を取り戻し、生活施設としてケアの時間を確保するといった施設のありたい姿を目指して、機器の選定を開始。**人にしかできない介護、業務に集中できる環境づくり**

STEP 2

ゆとりのあるケアの提供と
利用者と笑顔で過ごせる時間づくり

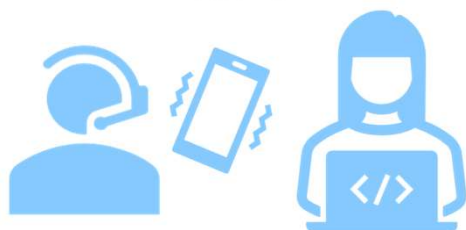


STEP 1

職員が安心して力を発揮できる、
活気ある職場づくり



介護テクノロジーの
導入



ライフリズムナビ + Dr.

- ・ ライフリズムナビ + Dr.は、ベッドセンサーやその他の室内センサー、見守りカメラ等との連携により、ベッド上での状況把握や体動時のアラート設定を行うことができる。

製品名	・ ライフリズムナビ + Dr.
企業名	・ エコナビスタ株式会社
製品の特長	・ 室内に設置したセンサーで室内の状況をリアルタイムに把握。個別に細かくアラート設定が行える ・ 導入前から導入後までメーカーによる伴走支援が行われている
導入機器	・ SleepSensor 70台 ・ どこでも見守りカメラ 84台



導入の決め手



- ・ 設定が簡単（直観的にわかりやすく、AIの支援もある）
- ・ 音声でアラート通知がある（スマホを出さなくてもわかる）
- ・ アラート時の画面上の色分けが分かりやすい

引用元：[ライフリズムナビ® + Dr. | 睡眠解析技術をベースにしたSaaS型高齢者見守りシステムで、介護・医療現場のお悩みを解決します。](#)

※ライフリズムナビ® + Dr. は見守り機器であり、医療機器ではありません。疾病の診断・治療・予防を目的として使用することはできません。

過去のつまづき経験から…

- 今回の機器導入の前に、過去2回の見守り機器導入の経験があったが…。
- 過去の経験から得られた示唆をふまえ、今回の機器選定・導入を進めた。

過去の経験

① 機器への過度な期待

見守りシステムの検知速度が既存機器（フットセンサー）の検知速度を下回る場合があることを知らないまま、導入してしまった。
カメラや通知設定の機能の検証を十分行わないまま導入してしまい、機能に対する不満から、施設での活用が進まなかった。

導入初期は生産性が下がるというU字法則を知らなかった。

② 通信環境の未整備

機器本体の選定にばかり意識が向き、ネットワーク環境について十分に検討できていなかった。
施設内のWi-Fi環境が不十分なために、機器が十分に活用できなかった。

③ 担当者・チームの不在

現場の職員を十分に巻き込むことができず、その結果、導入の目的や目標設定があいまいになり、現場での機器活用が定着しなかった。

PDCAサイクルが十分に回っておらず、特に「Check（評価）」や「Action（改善）」が不足していた。

得られた示唆

機器の性能・性質を理解したうえで、導入の目的に合致するかという判断をすべきだった。

U字法則を前提として導入スケジュールを検討するなど、機器等の導入にあたっての前提知識を事前に得ておくべきだった。

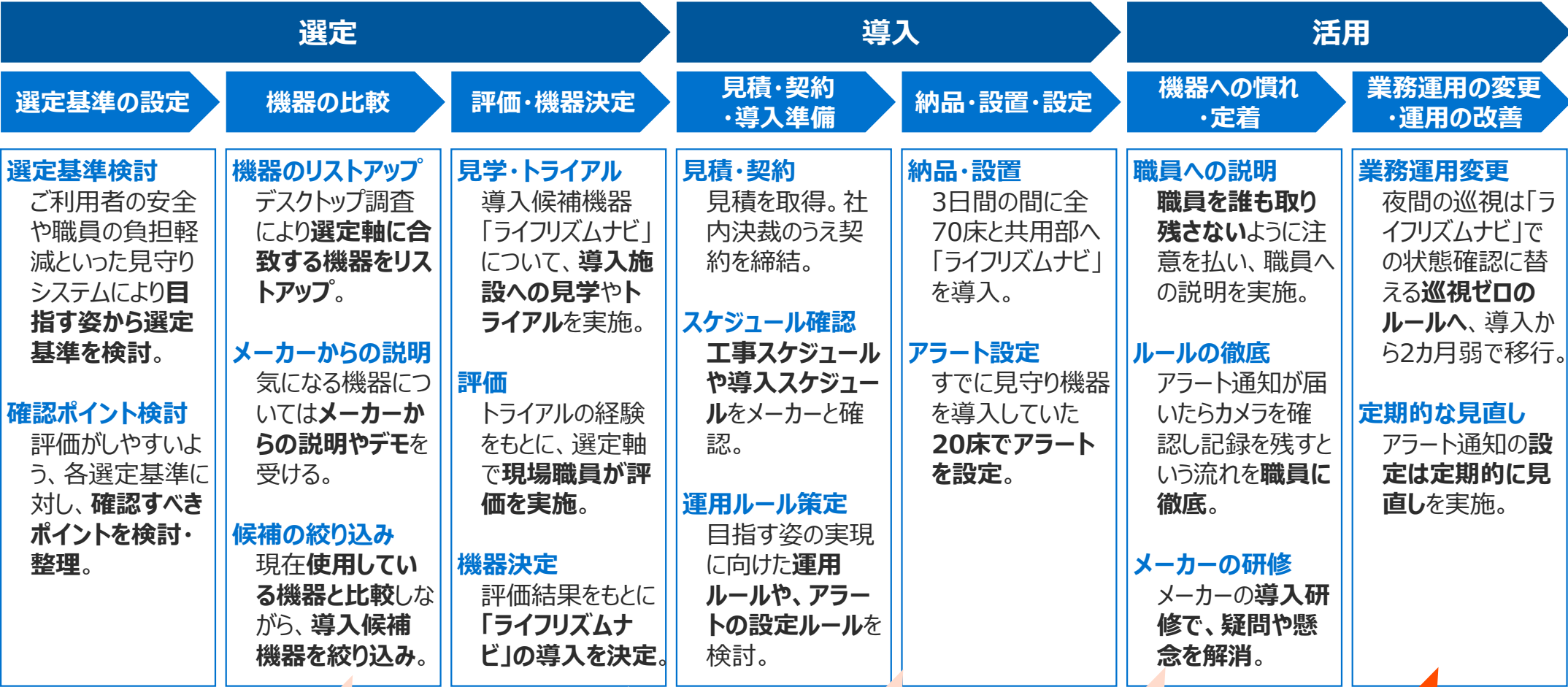
導入時にネットワーク業者と連携すべきだった。
最低限、IPアドレスなどの基礎的な知識を持っておくべきだった。

担当チームを発足し、目標を体系的に整理（大項目：職員の負担軽減、中項目：巡視の削減、小項目：全員がスマホを持つ 等）したうえで、職員に周知すべきだった。

担当者を設置してPDCAサイクルを回し、アプリの起動不良や画面の見づらさ、タップ回数の多さといった**小さな不具合も解消**すべきだった。

選定・導入の流れ

- 見守りシステムにより目指す姿から選定軸を検討し、デモやトライアルを経て、導入機器を決定。
- 導入と並行して運用ルールやアラート設定のルールを検討し、導入から2カ月弱で巡視ゼロを達成。



つまずき
ポイント①
デモの限界

つまずき
ポイント②
アプリ干渉
問題

つまずき
ポイント③
工事の失念

つまずき
ポイント④
充電問題

つまずき
ポイント⑤
アラートオフ
事件

つまづきポイント⑤ アラートオフ事件

- 設定に関するルールの認識が十分ではなかった職員が通知設定を全てオフにしてしまった。
- 対応として、ライフリズムの活用ルールをより分かりやすく修正し、職員への再周知を行った。

発生したトラブル

- 設定はリーダーしか触らないというルールにしていたが、導入2日目、**通知音量が大きく、利用者様を起こしてしまうと感じた職員が、全アラートをオフにしてしまった。**

トラブルへの対応

- 夜間は静かなため通知音量が大きく聞こえる、という**職員からの意見を受け、音量設定を見直した。**
- リーダーしか触らないルールである設定に、アラート通知の設定も含まれるということが職員に周知できていなかったことが分かり、**ライフリズムナビの活用ルールをより分かりやすく修正し、職員への再周知を行った。**



ルールを決め、それを共有していても、現場への周知が不十分だと、思わぬトラブルが発生することが分かりました。
ライフリズムナビの活用ルールを定めて明文化することで、職員の理解を促進しています。
(操作方法を説明していない職員が設定もできてしまう、操作の簡単さには驚きました。
現在は限られたアカウントのみに設定権限を付与しています)

チーム作りの工夫

【特別養護老人ホーム星の里DX委員会】

職 種	役 割	ポ イ ン ト
施設長	目標設定支援	・DX委員長には役職を持たない介護職員を抜擢。リーダーは日々のマネジメントで多忙のため、支援役に回る。 ・法人本部職員が支援。日々のイベントでタスクが埋もれないよう管理。現場職員が取り組みに集中できる環境づくり。 ・実現可能な目標と期限を設定し、達成できそうか、日々声掛け
DX委員長	課題集約、改善策立案	
介護係長	現場での実行状況確認	
ユニットリーダー	委員長の補佐	
看護職員	介護部門との連携	
生活相談員	加算対応、ご家族対応	
DX委員	現場の課題を抽出し、委員長へ報告	
総務課職員	タイムスケジュール管理、業者窓口対応	

【開催頻度】

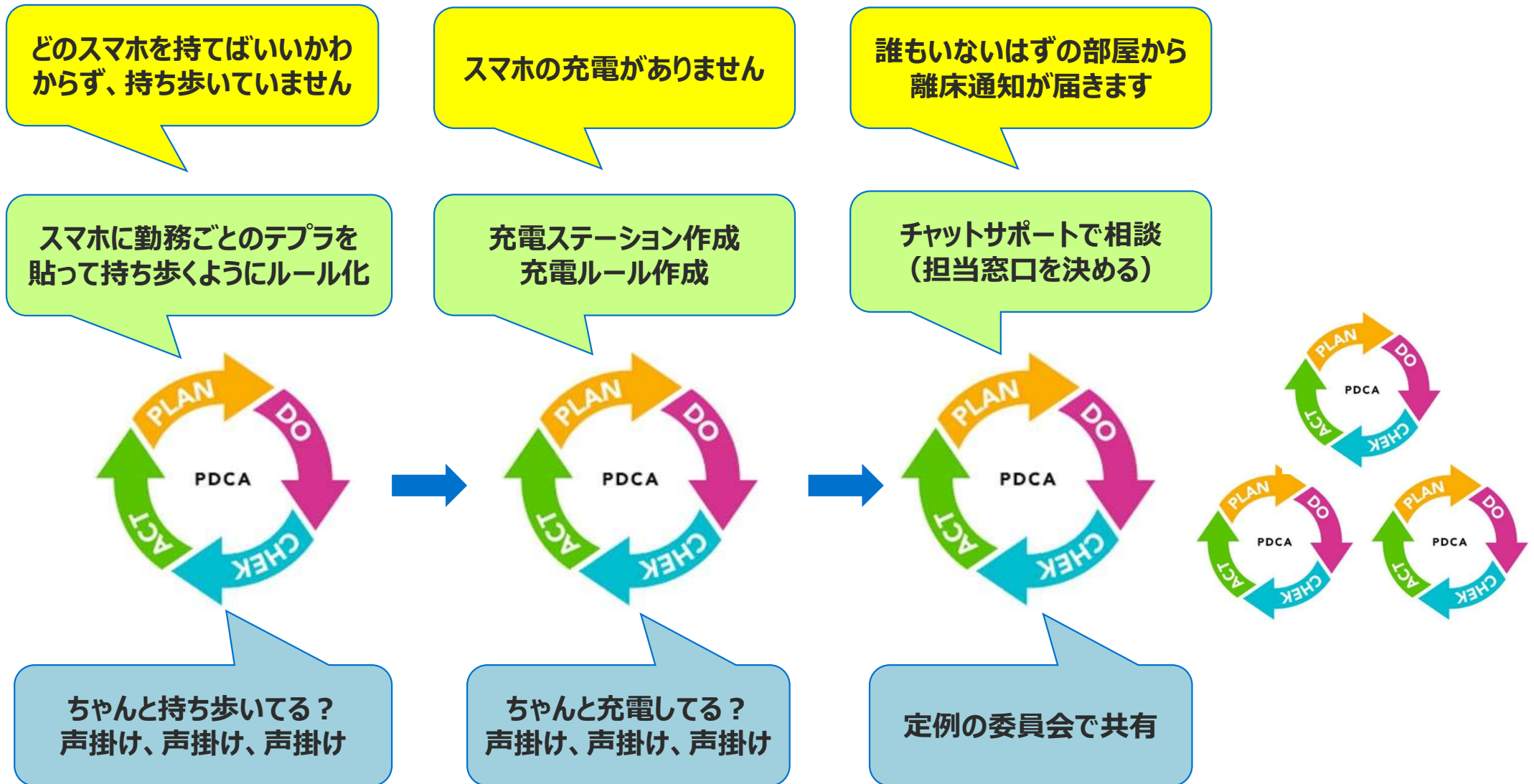
第1・第3水曜日 14:00～15:00開催

第2・第4水曜日 コアメンバーミーティング（30分程度）
施設長、DX委員長、介護係長、総務課職員

その他必要時 必要な職員を集めてミーティング



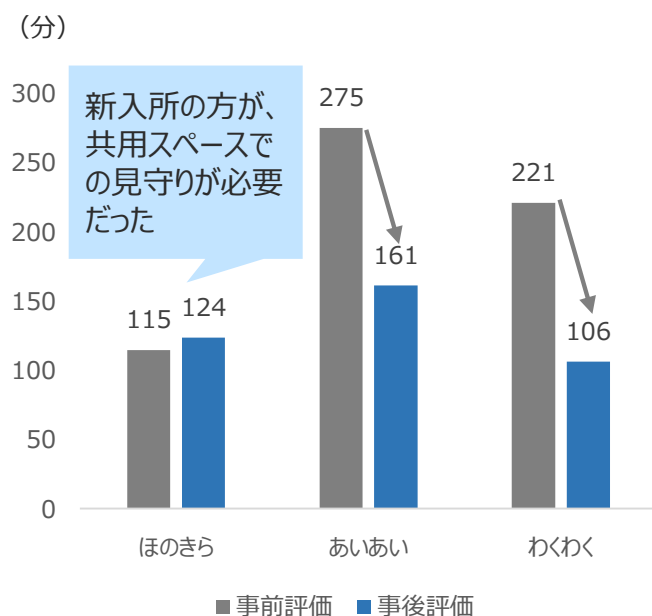
PDCAの歯車を回し続けて…



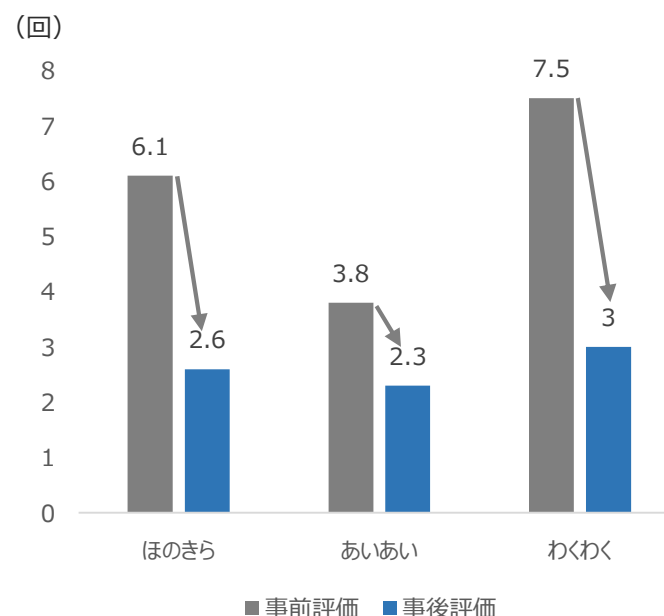
効果検証①夜勤業務の負担軽減（1/2）

- 夜間巡視のオペレーションを変更したことにより、あいあい・わくわくのユニットでは、夜勤の巡回・移動にかかる時間が削減され、全ユニットで、夜間の訪室回数と夜勤の歩数が減少し、職員の身体的な負担の軽減につながった。

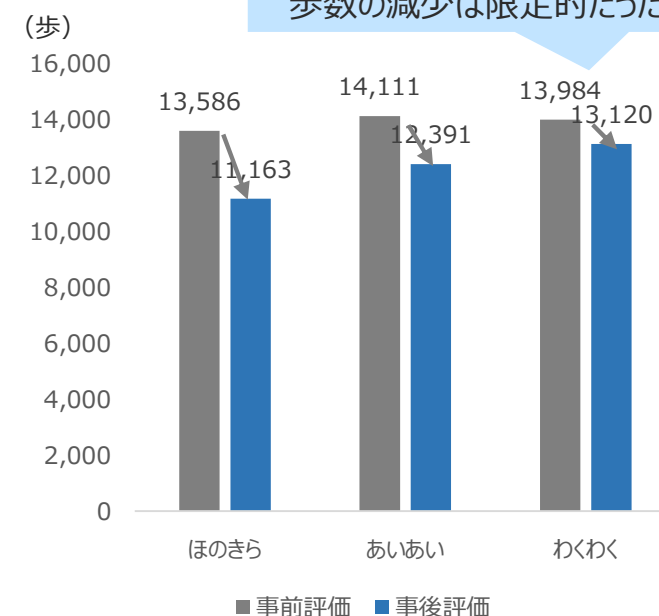
夜勤の巡回・移動時間



夜間の訪室回数



夜勤の歩数



※夜勤：18時～翌10時（16時間）
 ※タイムスタディによる業務割合をもとに、
 1夜勤シフトを16時間（960分）として試算。
 事前評価期間：2025年7月13日～23日
 事後評価期間：2025年11月20日～12月1日

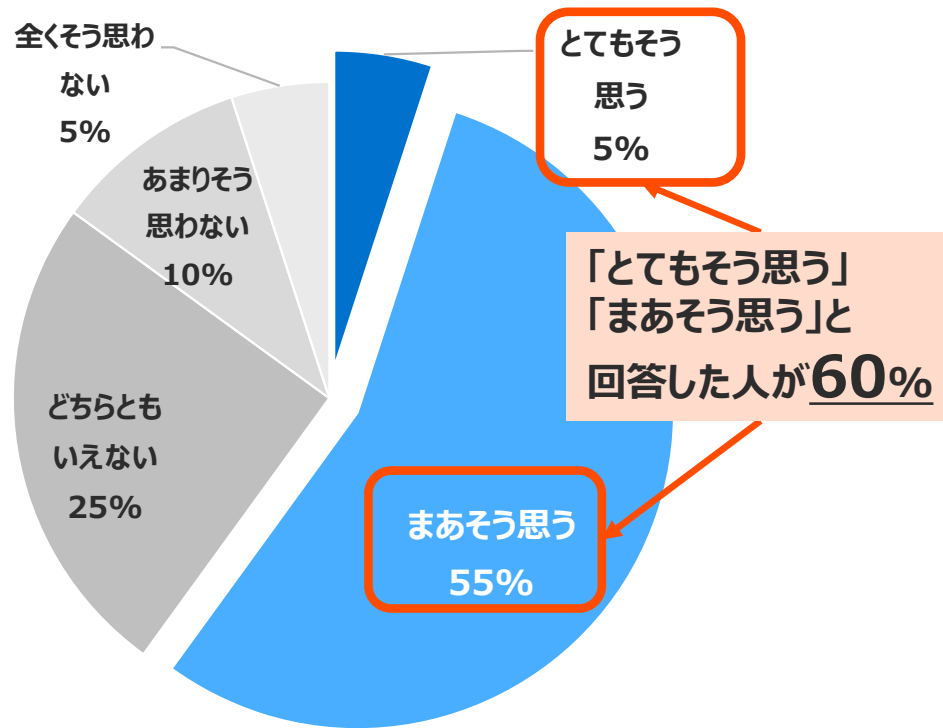
※21時～翌6時までの平均訪室回数。
 ※事前・事後での入居者変更、
 期間中の入退院者のあった部屋のデータは除く
 事前評価期間：2025年7月24日～30日
 事後評価期間：2025年12月8日～14日

※夜勤：18時～翌10時の歩数。
 ※オペレーション変更のあった夜勤のみ計測。
 事前評価期間：2025年7月24日～30日
 事後評価期間：2025年12月8日～14日

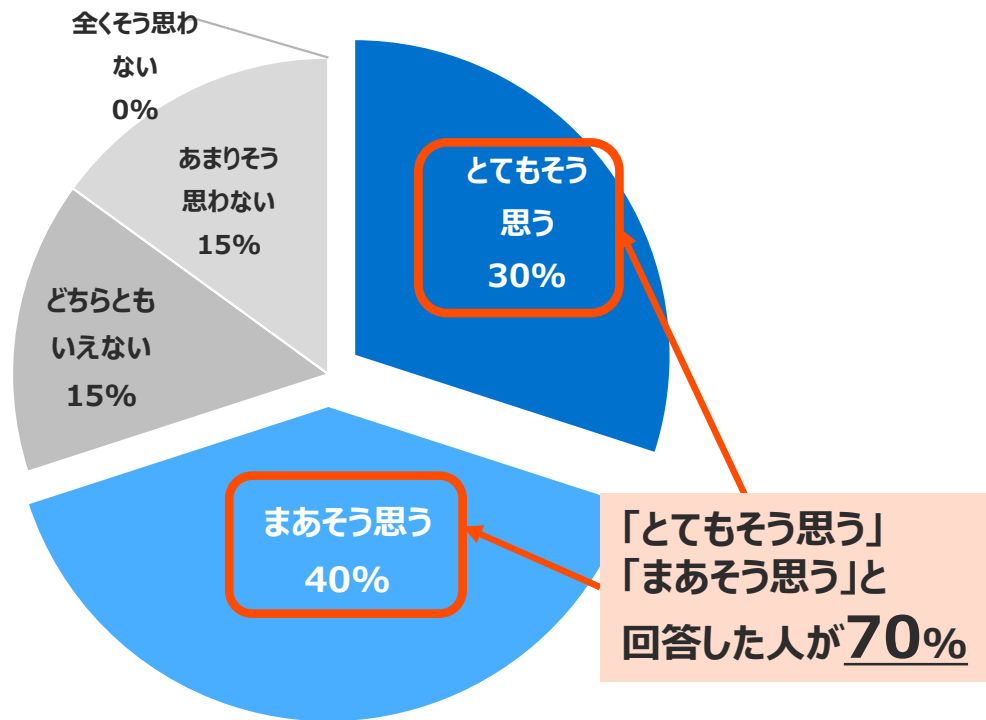
効果検証①夜勤業務の負担軽減（2/2）

- 職員を対象としたアンケート調査の結果、ライフリズムナビの導入により、夜間業務に精神的な余裕をもつことができるようになったと回答した人が約6割、夜間の定期巡回の移動の負担が軽減したと回答した人が約7割であり、職員の主観としても夜勤業務の負担が軽減した。

ライフリズムナビの導入によって、夜間業務に精神的な余裕をもつことができましたか。



ライフリズムナビの導入によって、夜間の定期巡回による移動の負担は軽減したと思いますか。

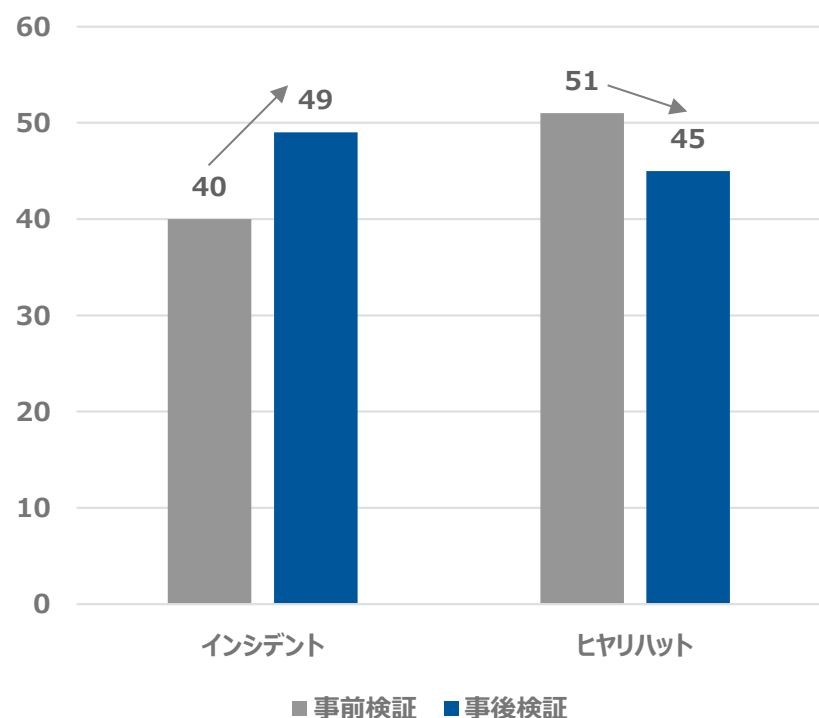


※介護職員24名を対象としたアンケート調査より
夜勤は担当していない4名の回答は除く

効果検証②インシデント・ヒヤリハットの防止と対策（1/2）

- ・ インシデント・ヒヤリハットの発生件数は共に減少を目指したが、インシデント発生件数は微増した。
- ・ ただし、ライフリズムナビの導入によってインシデント発生後の分析・再発防止策の検討に活用できた他、遠隔でもカメラによる見守りが可能になったことで、職員が安心感を持って業務に取り組めるようになった。

インシデント・ヒヤリハット件数



（単位：件）
事前評価期間：2025年7月1日～9月30日（3か月間）
事後評価期間：2025年10月1日～12月31日（3か月間）

見守り機器の活用による取組事例

機器導入前（7月～9月）

インシデントの発生後、再発防止策の検討が難しく、時間がかかっていた。

食堂に利用者がいながら各居室での対応が必要となき、食堂に居る利用者から目を離す不安があった。

機器導入後（10月～12月）

インシデント発生時の録画を確認できるため、事故の発生要因を想像で考える必要がなくなった。

その結果、**より短時間で、実態に沿った再発防止策を検討できる**ようになった。

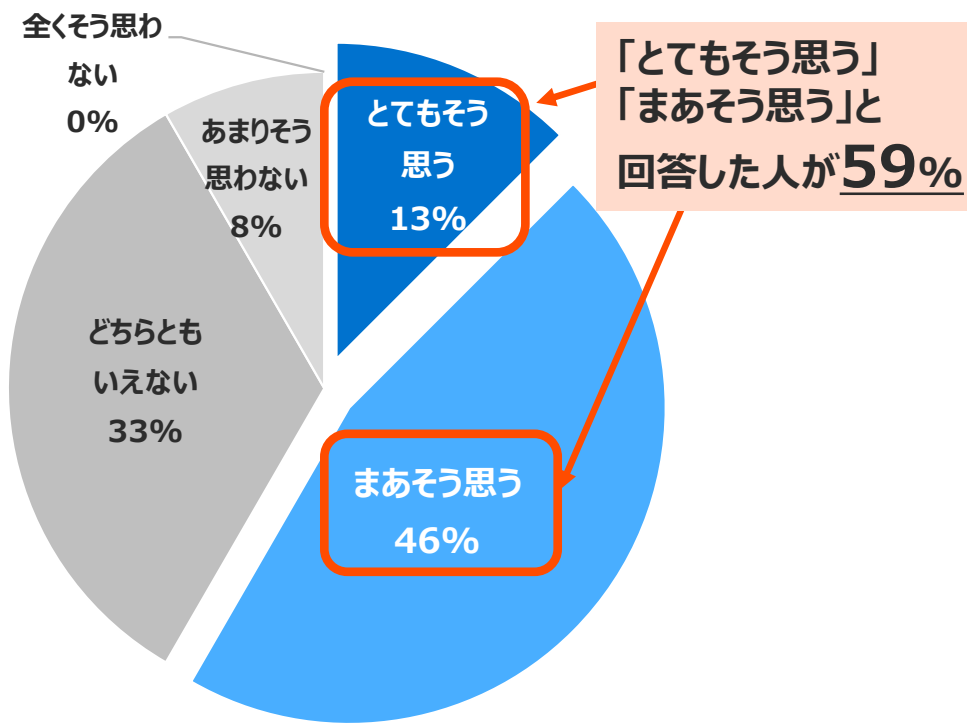
カメラを確認しながら居室を回り、利用者の動きがありそうなときのみ食堂に戻るようになった。

遠隔で状況を把握することができるようになり、**利用者を直接見守りしていなくても安心して業務に取り組める**ようになった。

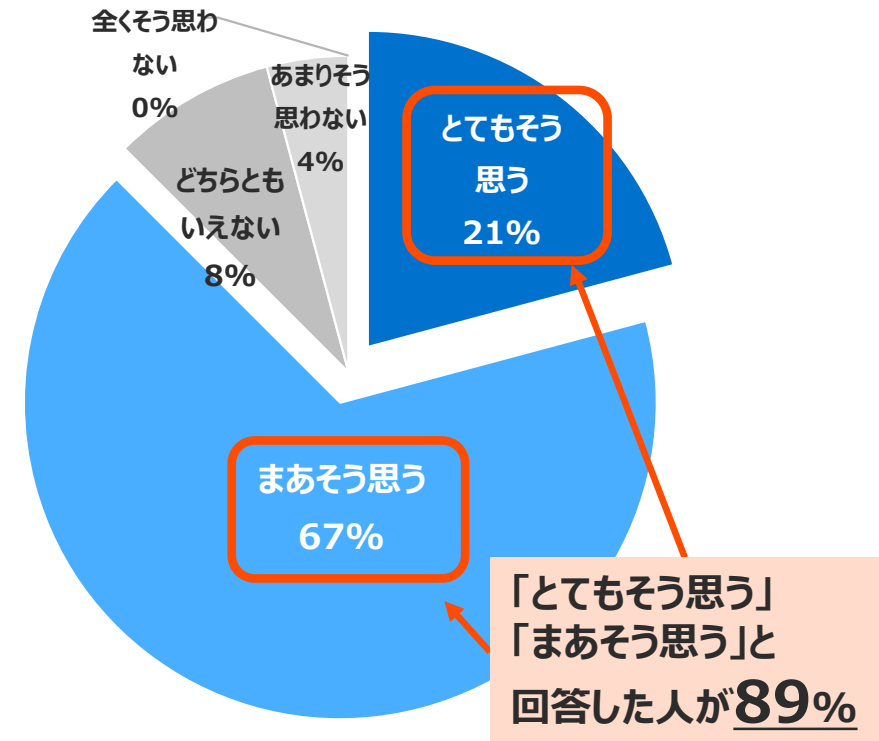
効果検証②インシデント・ヒヤリハットの防止と対策（1/2）

- 職員を対象としたアンケート調査の結果、ライフリズムナビの導入によって転倒・転落事故に対する不安感が軽減したと回答した人が約6割、見守りに安心して取り組めるようになったと回答した人が約9割となり、ライフリズムナビの活用による事故防止の取組が、職員の心理的な安心感につながっていることが示された。

ライフリズムナビの全床導入によって、
転倒・転落事故に対する不安感は軽減しましたか。



ライフリズムナビを活用して遠隔で利用者の状況が
確認できることにより、見守りに安心して取り組める
ようになりましたか。



※介護職員24名を対象としたアンケート調査より

まとめ

- DX化は単にツール導入ではなく、業務の見直しを続ける地道なプロセスである。
- DX化は未来への投資であり、持続可能な介護を続けるために必要であると考ええる。

① 目的に応じたテクノロジーやその機能を選択すること

テクノロジー導入は目的ではなく、手段である。まずは目的を明確化する。

完璧にフィットする介護テクノロジーはない。どの機能を何の目的に使うかを考えることが大切。

とはいえ、更なる使いやすさや施設への適応に向けて、継続的にメーカーに使い手側の意見を伝えていくことは必要。

② 業務フロー全体を見直すこと

テクノロジーを1つ導入するたびに、2～3つの業務をやめる・統合するという発想で、業務フロー全体を見直すことがDXである。単純にICT化しただけでは、費用対効果が薄いことが多い。

③ テクノロジーの活用に向け、PDCAを回し続けること

まずは小さな成功体験から。

PDCAのうち、特にCAが重要と考える。PDCAを回すのは職員。チーム作り、日々の声掛けも大切。

さらに、固定の職員だけではなく、施設職員の誰しものが対応できるような仕組みづくりを進める。

テクノロジーは日進月歩のため、最新情報の収集を行うことも必要。

ある職員との会話

【場面】

見守りシステムを導入して数日が経過。ある職員が夜勤明けで残って、リーダーからレクチャーを受けている。一度ではなく何度もその姿を見かける。施設長が、山田さんへ声をかける。



施設長

どうしてそんなに頑張っているんですか？



山田（仮名）

私だけ取り残されたくないんです



施設長

どうしてそう思ったのですか？



山田（仮名）

みんなでやるんですよね？



施設長

2つのことを感じました。
1つは**山田さんがチーム員として、一生懸命操作を覚えようとしてくれていることが素晴らしい。**
もう1つは、**情報共有の大切さ**です。今回取り組みを始める前に、**事業所全体で取り組むことを共有した、そのことが山田さんの心に残って、山田さんを動かした。** 情報共有の大切さを改めて痛感させられた出来事でした。